
能

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
能

【Nコード】
N4211V

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
能を究めんと修業を続ける長谷川如是。彼がその修業の末に見たものは。能の世界は宇宙だとも言われています。

第一章

能

長谷川如是はだ。能の師匠に言われていた。

「御前の動きも演技もいい」

「有り難うございます」

「しかし駄目だ」

師匠はだ。厳しい顔でこう告げるのだった。

「まだ足りないものがある」

「といたしますと」

「稽古が足らん」

言うことはこれであつた。

「まだ足らん。足りんぞ」

「足りませんか」

「より稽古をしろ」

師匠は厳しい顔で弟子にまた告げた。

「よいな、よりだ」

「そのうえで、ですな」

「能にまことに必要なものが何かを見出すのだ」

そうせよというのである。稽古を通じてだ。

「よいな。それで」

「わかりました」

そしてだ。如是も静かに、そして素直に答えた。

「さすればその様に」

「うむ」

こうしてだつた。如是は師匠の言葉通りこれまで以上に稽古に励んだ。彼は元々稽古好きで知られていた。しかしそれがさらに激しくなつたのだ。

まさに朝から夜までだつた。誰もがそれを見て驚きを隠せなかつ

た。

「前よりもだな」

「ああ、稽古に励まれるようになった」

「あそこまでとはな」

「なかつたな」

こう話すのだった。その彼を見てだ。

「稽古は確かに大事だが」

「あそこまで励まれるとは」

「まさに寝食を忘れるまでだ」

そこまでなのだった。今の彼はだ。

食べる量も寝る時間もだ。かなり減った。それで見る間に痩せていく。しかし彼はだ。英気をみなぎらせて稽古を続けているのだった。

その彼を見て誰もが心配した。しかしだった。師匠は言うのだった。

「あれでいいのだ」

「宜しいのですか」

「今の状況で」

「あれで」

「そうだ、いいのだ」

また言う師匠だった。稽古場で稽古を続ける如是を見ながら。

稽古着は着物だ。それを着てだ。能のそれぞれの舞を舞いそれぞれ役を演じていく。一人でもそこには舞台そのものがあった。

その舞台の中でだ。彼は待っていく。それを見てなのだった。

「あれでだ」

「しかしです。あのままでは」

「やがては」

「一度倒れるのもいいのだ」

師匠はそれも見ていた。

「そうなるのもな」

「いいというのですか」

「倒れるのも」

「それも」

「そうだ。倒れるまでやる」

師匠の言葉は強い。

「そうしてまた起き上がりやるのだ」

「そこまでやってなのですか」

「能はそうだと」

「そう仰るのですか」

「能にあるものは深いのだ」

彼は見ていた。今それをだ。

「如是はそれを見るべき者だ。だからこそだ」

「あそこまで稽古をですか」

「されているのですか」

「わしが言った」

言ったのは自分だと。師匠はここで言った。

「しかしだ。やっているのはあの男よ」

「如是さんがですか」

「御自身からですか」

「稽古から掴める」

師匠の言葉は変わらない。

第二章

「それがな」

彼はわかっていた。だがそれが何かを言わずにだ。如是の稽古を見るだけだった。早朝から深夜まで連日連夜行われる稽古がさらに続いた。

そしてだ。それが続くうちにだ。

如是はさらに痩せた。頬がこけ身体も木の枝の様になる。だがそれでも目は爛々と光り生氣に満ちていた。そのうえで稽古を続けだ。やがてだ。彼は見たのだった。

稽古をしていてだ。そこに見たものは。

「これは」

彼は自分が稽古場にはおらずに別の世界にいることに気付いた。そこは。

しかしその世界を見た瞬間にだ。彼は倒れてしまった。気付いたのは布団の中だった。自分の部屋に運ばれそこで寝かされていた。

枕元には師匠や弟弟子達がいた。弟弟子達は彼が目を覚ましたのを見てまずはほっとしたのだった。

「目を覚まされましたね」

「何よりです」

「どうなるかと思いましたがよ」

「どうなるか？」

その言葉にだ。彼は布団の中で目をしばたかせた。木の天井を見ながら。淡いその色を見ているとだ。それだけで落ち着きを感じられた。それを感じながらそうしたので。

「どうなるかとは」

「ですから。ずっとあまり食べておられませんでしたし」

「寝てもおられませんでしたし」

彼等は本人にこのことも話した。

「ですからです」

「倒れられたので」

「そうだったのか」

寝食を忘れていたことにも今気付いたのだった。

「私は随分と」

「ですが何とかですね」

「目を覚まされて何よりです」

「ずっと他のものが見えていなかった」

実際にそうなっていたというのだ。彼は。

「だがあの時」

「あの時？」

「あの時とは？」

「私は見た」

そうだというのである。

「確かに」

「？一体何をですか」

「御覧になられたのですか？」

「それで一体何を」

彼等にはわからなかった。しかしだ。

師匠がだ。ここで彼に言ってきた。

「見たか、遂に」

「はい」

その通りだとだ。彼は師匠に答えた。師匠の顔を見ながら。

第三章

「見ました」

「ではそれは何だ」

師匠は如是自身にそれが何かも問うた。

「それは何だった」

「宇宙です」

それだというのである。

「虚無。そうしたものです」

「そうだ。それだ」

「私はそれを見ました」

如是はまた己の師匠に話した。

「稽古の中で」

「そうだ。能とはだ」

「はい、能とは」

「無だ」

それだというのである。

「無こそがその真なのだ」

「何処かで聞いたことはありませんが」

「聞いただけでは駄目なのだ」

「それがわからなくてはなのですね」

「己がその中に入ればわかる」

こつも話した。弟子に対して。

「だからだ。御前に稽古をさせたのだ」

「成程、それで良かったですか」

「如是、御前は能の世界の入り口に立ったのだ」

「入り口ですか」

「そうだ、入り口だ」

そこにだというのである。

「ようやくそこに立ったのだ」

「そしてこれからですね」

「入れ。そして極めよ」

またで詩に告げた。

「よいな。そうするのだ」

「わかりました。それでは」

こうしてであった。如是はだった。

それからも能の道を進んだ。何時しか彼は当世随一の能の演者として知られるようになった。極めたと言われた。しかし彼は常にこう言うのであった。

「まだまだ先があります」

こうだ。常に周囲に話すのだった。

「私は玄関に入ってもいません」

「玄関にもですか」

「入っていませんか」

「玄関に入ってもまだ屋敷の中があります」

それもあるのだと。さらに話すのだった。

「ですから。私はまだ極めてはいません」

「左様ですか」

「そうだと」

「はい、それはまだです」

落ち着いて達観して述べる。

「それはこれからののです」

「これからですか」

「屋敷の中に入られるのは」

「そうです。この人生でそこまでいけるか」

深い話だった。それを続けるのであった。

「わかりませんが。それでもです」

「目指されるのですか」

「その最後を」

「はい、私はそうします」

こう話す。

「無限の。能の世界をです」

こう言っただ。自身の言葉通り能の世界を進むのであった。

これが彼の見たものである。そして彼はその生涯を能に捧げた。そうしていったのである。

そんな彼を人々は能神とまで呼んだ。だが彼はそれについて思うことなくだ。ただ能の無限の中にいた。彼のいるべき世界の中に。

能 完

2011・2・1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4211v/>

能

2011年8月2日03時28分発行